

武蔵野日曜講筵

REVIVAL

——ルカ伝第23章39～49節、24章32～43節——

1989年3月26日

小池辰雄

復活を聖書に書いてある通りに信じる 十字架の預言イザヤ書53章 ゲッセマネの血禱 罪びとの首、使徒の首 クリストはよみがえりましぬ 空色一如の世界 霊体的な質が肉体の中に形成される もう死んでも死なない 雲散霧消の贖罪 新生の現実を生きる

【ルカ23】

39 十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏りて言う『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』40 他の者これに答え禁めて言う『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。41 我らは為しし事の報を受くるなれば当然なり。然れど此の人は何の不善をも為さざりき』42 また言う『イエスよ、御国に入り給うとき、我を憶えたまえ』43 イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にバラダイスに在るべし』

44 昼の十二時ごろ、日、光をうしない、地のうえ遍く暗くなりて、三時に及び、45 聖所の幕、真中より裂けたり。46 イエス大声に呼ばわりて言いたもう『父よ、わが霊を御手にゆだね』斯く言いて息絶えたもう。47 百卒長この有りし事を見て、神を崇めて言う『実にこの人は義人なりき』48 これを見んとて集まりたる群衆も、ありし事どもを見てみな胸を打ちつつ帰れり。49 凡てイエスの相識の者およびガリラヤより従い来れる女たちも遙かに立ちて此等のことを見たり。

【ルカ24】

32 かれら互いに言う『途にて我らと語り我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』33 斯て直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、34 『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』35 二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。36 此等のことを語る程に、イエスその中に立ち『平安なんじらに在れ』と言ひ給う。37 かれら怖じ懼れて、見る所ものを霊ならんと思ひしに、38 イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、39 我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて



見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』⁴⁰〔斯く言いて手と足を示し給う〕⁴¹かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう『此処に何か食物あるか』⁴²かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、⁴³之を取り、その前にて食し給えり。

●復活を聖書に書いてある通りに信じる

復活節は、クリスマス・復活節・聖霊降臨節というキリスト教の三大節の真ん中の復活節です。今、どれだけの牧師さんや神学者がキリストの復活を聖書に書いてある通りに信じているかは、はなはだ疑問です。

「脱神学」

といって、神話伝説の一つくらいに数えている人もあります。我々が育った無教会ではかなり聖書通りに受けとっています。しかし、それもやむを得ず、

「聖書に書いてあるから」

というくらいなところで、観念の域を脱しない。

ところで、復活節を迎えるに、どうしてもその前段に言わなければならないのはキリストの十字架です。十字架の死がなければ復活ということもいわけだから。使徒たちが非常に伝道の上で宣伝していたのはむしろ復活の方が多いかもしれません。パウロは十字架と復活は離さないで、その書簡でもって、ある時は十字架一点張り、ある時は復活一点張りでありましたけれども、パウロの構造ははっきりしています。

●十字架の預言イザヤ書53章

この十字架と言っていますが、これは旧約で既に預言されている。だから、キリストはこの預言を成就するために十字架にかかられた。申すまでもなく、イザヤ書53章です。私は『聖書は大ドラマである』〔小池辰雄著作集第十巻 1988年刊〕にイザヤ書53章は全部訳してあるから、それを読みます (286～288頁)。

「1誰が信じたか、我らの聞きしことを。

エホバの腕は誰に現れたのか。

2彼はみ前に芽生えの如く、

乾ける地からの根株の如く生い立った。

彼には容姿なく、見るべき端麗さなく、

我らが慕つべき見栄えもない。

3彼は蔑すまれ、人々に棄てられ、

苦患を知る悲痛の人であった。

ひとは顔を隠して彼を卑しめたが、



我らも彼を意に介けなかった。

4 まことに彼は我らの苦患を荷い、

我らの悲痛を負っていたのに、

我らは彼をこつ見なした、

神に打たれ苦しめられているのだと。

5 否、彼は我らの不義の為に刺し貫かれ、

我らの罪のために碎かれたのだ。

彼に対する懲罰は我らの平安となり、

傷痕だらけの彼によって我らは治癒された。

6 我らは皆羊の如く迷いゆき、

各々その路に向った。

然るに神は彼の中にぶち込んだ、

我らのすべての罪を！

7 彼は迫害されたが耐え忍び、

しかもその口を開かなかつた。

屠場に索かれる羔の如く、

毛を剪る者の前の雌羊の如く、

彼は黙してその口を開かなかつた。」(イザヤ53・3～7 私訳)

まあ驚くべき文字です。キリストは本当にこの通りに迫害されて、十字架にかかる前にまた十字架そのものをもってこれを満たした。

●ゲッセマネの血禱

もうひとつ読みたいところはゲッセマネの祈りのところですが、弟子たち三人が一緒にいたのだけでも、彼らは眠ってしまった。キリストは十字の形に、十字架と同じ形に平伏して祈った。そういう形で平伏しているのをデユラーが描きました。

「自分はこんな苦杯は受けたくない。けれども、あなたの御意ならば受けます」と。こういう言葉を三度、彼は神さまに語った。血の叫びです。

「その汗は血の如くであった」

とルカ伝に書いてある。第十巻の394頁、「ゲッセマネの血禱」と書きました。

「³⁸わが魂深く悲しみて死ぬばかりなり。汝ら此処に止りて我と共に目醒め居れ。³⁹(イエス)少し進みゆきて平伏し、祈りて言い給う「わが父よ、もし得

べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給え、されどわが欲うままに非ず、汝の御意のままに。」(マタイ26・38～39)

「イエスは十字架の贖罪死を何によって自覚されたか。それはイザヤ書の第53章によつ



てであることは疑いの余地がない。

「彼は侮^{あなど}られて人に棄てられ、……彼はわれらの罪のために傷けられ、我らの不義のために碎かれ、自ら刑罰を受けてわれらに平安を与う」(イザヤ53・

3、5)

が特にその預言の焦点である。

この「碎かれ」という言葉から私は「碎けの神学」を展開したわけです。

そして十字架と復活を弟子どもに予告した(マタイ16・21、17・9、20・18)。しかしよいよそれを父神への祈りに於て決定的に体受し給うたのが、エルサレムの東方ケデロンの谷を渡って入るオリブ山林の中のゲッセマネ(「油しぼり」の意)の血禱に於てである。ペテロ、ヤコブ、ヨハネも共にいたが彼らは魂が眠っていた。天から御使が現れてイエスに力を添えたが、イエスは祈りに於て文字通り油汗をしばらく、滴る汗は血の雫の如くであった(ルカ22・44)。正に血禱であった。いきなり天界にエリヤ以上に昇るべき人が、贖罪のため十字架されねばならないという人類の歴史を両断する瞬間の祈りであった。人間イエスは三度同じ祈りを祈り、死の苦しみをここに受け、自己の願いに死に、神の本願を体受し給うた。神の本願の化身となったイエスはユダの裏切りを受けローマ兵に泰然として捕われたのである。」

私は今日の復活節をいまだかつてない気魄でもって臨んでいます。去年の夏の集会(第35回夏期特別集会1988年8月19～21日「ヨハネ」、夏期特集の最終回)から私は本当に変わっているんです。……

● 罪びとの首、使徒の首

第十巻の「12月14日」の「罪びとの首、使徒の首」のところを読みます。パウロの言葉です。

テモテ前書1章、

「¹⁵キリスト・イエス罪人^{つみびと}を救わんために世に來たり給えり、とは信ず^{まき}べき止しく受くべき事ぞ。その罪人^{つみびと}の中にて我は首^{かしら}なり。」(テモテ前1・15)

パウロの告白です。私はこないだ言いました。内村鑑三先生が戦場ヶ原の会話でもって、「自分みたいなのやつが救われたのだから、私は罪びとの首だよ。この罪びとの首なる自分が救われたのだから、万人は救われるんだ」

と内村先生は書いています。三人目の罪びとの首は私です。私は罪びとの首です。パウロ、内村鑑三、小池辰雄。よく覚えてください。しかし、この罪びとの首がいかに戦うか。

十字架に救われながら、何のかんの言うやつは勝手にしろ。そんなものは相手にしないから。十字架の救いを何だと思っているか。

私は本当に変貌を賜っています。私は破れ切っているんです。碎け切っている。それはキリストが私にそうしてくださった。私の中に燃えているところの聖霊は、いかなるもの



をもつてしてもこれを消すことができない。

「テモテ前・後書はテトスと共に牧会書簡と謂われている。パウロが愛弟子テモテ（父はギリシア人、母はユダヤ人）に与えた私信。パウロは自分を「罪びとの首」と告白した。キリスト信徒を殺害したことを意識しての言であろう。しかし殉道者ステパノの故に、パウロは救われた。ついに彼は使徒の首となった。

パウロは使徒中の使徒です。内村鑑三も明治、大正にかけての日本の一番の精神的な人物です。私は自分で言つてはおかしいけれども、ゲートルに即して言うならば——ゲートルもその自覚を持っていた——

「本当のエゴイズムに死んだ者は本当のエゴイストになる」

んです。それは大我が生きているからです。『ヴィルヘルムマイスター』に出てくる言葉です。

「その生命を失わば、全世界を得るとも何の益あらん」

とキリストが言われた、そういう生命です。そういう我です。

これほど美事な劇的な変転は類例がなからう。内村鑑三も自らを「罪びとの首」と告白し、万人救済を唱えた。ところがキリストこそ「罪びとの首」と自らなり給つて、十字架の死を遂げ贖罪を果してくださいました。パウロによる聖霊の按手でテモテは恵まれた。この筆者もかなり多くの男女に聖霊の按手を施した。み霊を受けた後、聖言を化体してゆくことが大切である。そして十字架が土台になっていることを要する。十字架と聖霊は不可分である。」

「聖霊を受ける」ということは現象をいつているのではない。本当の現実なんですよ、これは。私は人間的にいえば、アウグスチヌス、親鸞、そういった部類の魂の質に似ている。

●キリストはよみがえりましぬ

ゲートルのキリストの復活のところを、ファウストが自殺しようとしたら、復活の歌が聞こえてきたので毒杯を飲むことを思い止まったことが『ファウスト』の最初の方に出ています。「天使の合唱」のところですよ。

「キリストはよみがえりましぬ。

死すべきものに、歎ひあれ、

忍びよりて、

滅びをもちたらず

世襲の罪をになえるものに。」

原罪のことです。そういった我々人間のためにキリストは甦ったから歎べという句です。

その次の「天使の合唱」は、

「キリストはよみがえりましぬ、

朽ち果てぬべき大地の胸より。」



いましら欣びいさめて

この世のきずなを断ち切れよかし。

行いをもて師を讃うるもの、

「師」というのはキリストのこと。行為をもつて師を讃える者、

身をもて愛を証しするもの、

同胞のごとく食を頒ち与つるもの、

お腹の空いている人、貧乏な人に食べ物を与える者、

法を説きつつ旅路ゆくもの、

伝道のことです。伝道しながら旅路を行く者、

来む世の歓びを宣へ伝つるもの、

来世の希望ですね、

いましらに、師はいと近し、

そういう人たちにキリストは近いんだと

師はいましらと共にぞいます。」(相良守峯訳)

さすがはゲエテです。ゲエテという人は、とにかく、まだ25、26歳ですよ、『ファウスト』(第一部)の原型を書いたのは、驚くべきものです。彼は異言の体験までしている。とにかく、福音の世界はちゃんと身につけている。彼らしいやり方をしている。

●空色一如の世界

今日は、

「リバイバル」

と題しました。「レリベール」というラテン語の動詞から来ている。「レ」が付くのは、

「レ、フォルマツイオーン」(宗教改革)

とか、

「ルネッサンス」(文芸復興)

とかある。「リバイバル」は生命の復興、復活。「レ」というのは「再び」という意味です。

キリストは、アブラハムよりも先に、天界に居られた。それを「ロゴス・キリスト」というが、私はこの「ロゴス」という言葉はあまり好きではない。神学上は、「ロゴス・クリストス」というんだけれども。

仏教的にいうと、

「空」

です。天界にいたキリストは「空」としてのキリストなんです。「空」という言葉は非常に難しい言葉ですけども。ただの「空っぽ」ではない。無相の相です。相無き相。神さま自身がそうだからね。それが受肉した。これが「色」です。



「空即色」
 という。空と色が相通する。般若心経にある。

「色即空、空即色」
 という。形のない実在が形をとったというわけです。それが「受肉」「インカーネーション」という。

これが十字架で一遍消えるわけです、色が存在を。それを「無」と謂おうが、「空」と謂おうがいいですよ。我々を贖罪して罪無きものにしてくださった。これが贖罪です。無罪の世界に。それが十字架の死なんだ。犠牲になったから。それでお終いであつたら、これはしようがない。我々は無で、無罪だけでも、また元に戻つてしまふ。ダメになつてしまふ。

これがもう一遍、甦つた。甦つたというのは、肉体がただ元の肉体に返つたということではない。これは霊体ですから。霊体だけでも、これは凄い霊体です。お魚も食べてしまつた。

「幽霊だとは思ふな、何かあるなら食べてみせるぞ」

と言つて、キリストは食べた。これは今度は、ただの「色」ではない。これを仏教的にいふと、

「空を空する」

という。空を空じた。その空を空じたこの空は、新しき色を、空色一如の世界を持つている、この復活のキリストというのは。大変なものだ。

これはルカ伝の復活のところを本当に受けとつている人はおそらく、神学者も牧師さんもないでしょうね。私はバカだから、本当に受けとる。

●霊体的な質が肉体の中に形成される

今、私はもの凄いの生命の中にいますよ。まあ、85歳にもなつて、こんなでつかい声を出すやつはないでしょう、おそらく。わざわざ出しているのではないよ。

私はとにかく人に誤解されるんだよ、いろんな意味で。こないだも言ったでしょ。山上の垂訓で私に一番合っているのは、

「幸いなるかな、憐れむ者、その人は憐れみを得ん」

という句です。私は、自分で言つてはおかしいけれども、憐れみの心は本当にあるんです。それが反つて躓きになつたりする。

人間はみんな生れつきのいろんなあれ（くせ）があるから、

「いいの、わるいの」

なんて言っているのではない。ただ「そうだ」と言っているだけのほなし。

ある人のために祈る時には私は魂がそつちへ飛んでいますよ、本当に、現場に。……



その驚くべきキリストの復活体が今、霊界に居られる。いつ再臨するかわからん。それを現実の希望として、いや実に現実として、私たちがキリストの復活体と同質なものを——贖われてそして霊体的な質がこの肉体の中に形成されつつある——それを受けとらないで、何が復活節か。……

私はぶったおれるまで集会をしますよ。あなた方も本当に、言葉の正しい意味においてエリートなんです、選ばれた人たちなんです。その自覚で大いにやってください。それはすることなすことに本当の力と智慧と創造力が出てくるから。

まず、弟子どもはみな落第したね、十字架・復活のときには。なかでも、マグダラのマリヤが一番キリストにしがみついた。

けれども、男性諸君が本当に使徒たちのような、この気合に入ってきたら凄いことになるよ。そう成りつつあることを私は見えています。大変うれしく思っています。

まあパウロの書簡を見ると、本当にパウロは素晴らしい。キリストを除いて、パウロだけの人はいまだかつて世界中におそらくないと言ってもいい。

さんざん悪いことをしたダビデすら、御前に平伏した。そして彼はメシヤの予徴として、

「キリストはダビデの子」

と言われているのではないですか。そういう聖書の驚くべき真理の光というものが読めていない。だから、このキリストやパウロには躓きます。

「異端の首^{かしら}」

と謂われる。本当の意味における異端者たちが、本当の正統者なんです。世界の精神史を本当に繋いでいるところの、築いているものはそういう意味の異端者です。ゲートもキリストの異端くらいに思われた。ところがどっこい。私はこないだからゲートを少し読んでいて、やはり凄いなと思っっている。

●もう死んでも死なない

キリストの復活の生命というものは、パウロがコリント前書15章でさんざん言っているように、

「もし、キリストが甦^{よみがえ}り給わなかったら、我々の信仰は空しい」

と。キリストが甦^{よみがえ}ったからうれいのではない。

「甦^{よみがえ}りのキリストが私たちの中に復活してください。生きてくださる。死んでも死

なない人にしてくださっている」

と。これが、我々が復活節を向かえているゆえんでしょ。もう死んでも死なないんだ。その復活の生命の中心は何か。真ん中で燃えているものは何か。それは聖霊です。やがて来るところのペンテコステのことになりますから、今日はそうは語りませんが。一番大事なのは本当はペンテコステです。



「聖霊が臨んだら、お前たちは全部、私のことがわかるぞ」
と。「わかる」といつたつて、頭ではない。ペテロは、聖霊が本当に臨んだら、
「我を視よ」

と言ったでしょ——ヨハネがいたから、「我ら」と言っただけでも——これは本当にキリストと一つになっているから。あなた方も、「我を視よ」とはつきり言っていていいんだよ。
「まだこういう欠陥がありますから…」
なんて、そんなことはひとつも心配いらん。贖い切られているものは、御霊にあつては「我を視よ」と言えるんです。

●雲散霧消の贖罪

第十巻の「8月2日」の「雲散霧消の贖罪」ところにイザヤ書43章の言葉がある。

「ヤコブよ、汝を創造したエホバ、今こう言い給う、

イスラエルよ、汝を造つた者今こう言い給う、

「恐れるな、我は汝を贖つた、我は汝の名を呼んだ、汝はわが有である。」（イ

ザヤ43・1）

みんな完了了でものを言っている。始めに業わざがあつて、それから言葉です。ゲーテが

「初めに業ありき」

と訳したのは、そういう気持もよくわかるね。

「我こそは我自らの故に汝の不義を消し汝の罪を心に留めない」（イザヤ43・

25）

神さまは神さま自らの故に、これは本当の——何と言いますかね——エゴイズムなんだよ、神さまというの——「エゴイズム」なんて言ったらおかしいけれども——こっち側の故だったら、私たちは本当はもうダメなんです、「神の故ゆえ」でなければ。

「汝はわが僕。イスラエルよ、我は汝を忘れない」（イザヤ44・21）

「我は汝の不義を雲の如くに消し、汝の罪を霧の如くに散らした。汝われに回

帰せよ、我れが汝を贖つたのだから」（イザヤ44・22）

「回帰したら、帰ってきたら、贖うよ」

ではない。

「贖つたから、さあ、飲んで帰ってこい」

と言うんです。

「お前は、本当は落第するんだけど。及第させてやったから、さあ勉強しろ」と言うのと同じことだ。

「学校の試験もやむを得ずやるんだ」

と書いたよ。



「入学試験のための試験勉強ばかりするな。自分の使命に生きる。使命を持って、そいつに打ち込んでいけ」

と。これは兼好法師の徒然草の一八八段に書いてある。

「ただ一つのことをやって、他のことは棄てる。人にどんなに嘲られたってかまわないぞ」

と。これは兼好法師の言葉ですよ。そういう気魄で生涯を貫いてください。

私は、顧みれば、ずいぶん無駄の時間をいろいろ費やしたよ。やつとここまで来た、というわけだ。まだまだこれから仕事があるから、死ぬわけにはいかん。使命感でもってはつきりとそういうように自覚しているところには、病がとつきません。

あなた方といよいよ楽しく、いよいよ勇ましく進んで行きたいと思うよ、本当に……聖霊の世界は決して人を恨みません。恨んだり憎んだりしたら、聖霊の世界は働かなくなる。

「お気の毒でございませす」

と、思っているんだ、私は。ずいぶん頑ななのがいるよ。どん底の愛です。どん底の愛を一番語っているのはヨハネ第一書簡の3章のところですよ。

とにかく、

「今日は、私はキリストと一緒に甦えりました。死んでも死なないような生命が来ました。キリストの復活をそのままからだで受けとったら、なんだか熱くなってきました」

と。いいよ、それで。その代わり、聖書が伝えている聖言を本当にそのまま受けとらなければダメです。そのままというか、

「その奥の現実を——言葉そのものではない——それを体受、からだで受けとれ」と言っている。読んで、

「分かるの、分からないの」

と、そんなことではない。

武蔵野集会は人数は多くない。

「けれども、一人ひとり凄じいぞ」

ということになってください。聖霊の事態を拒んだり、侮っていると、これはえらいことになる。知らんよ、どうなるか。

● 新生の現実を生きる

「善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや。……然れども自力の心を翻して、他力を頼み奉らば真実報土の往生を遂ぐるなり。」

だけれども、往生というのはこれからのことだ。我々は今生きている、今生なんだ。今



生きている。

「今日、汝われと共にパラダイスなり」

という世界。いつもキリストと一緒にパラダイスだ。

「煩惱^{まごころ}目^め足^{あし}の我^{われ}らはいずれの行^ゆにても生死^{しんじ}を離^{はな}れることあるべからざるを憐^{あは}れみたまいて願^{ねが}いをおこしたまふ本意^{ほんい}、悪人^{あくにん}成^な仏^{ぶつ}のためなれば、他力^{たうりき}をたのみたてまつる悪人^{あくにん}、もつとも往生^{おんじやう}の正^{ただ}因^{いん}なり。」

「罪^{つみ}びとを招^{まね}かんために来た」

という、あれと同じことです。

まあしようがないね、この人間というやつは。なんのかんのと、国際関係だつてみんなからくりばかりやっているわ。一方では凄い武器を造っているしね。そうかと思うと、この頃の政治はどうですか。一遍引つくり返つたらいいね。なんだい、今度の悪税は。またぞろそれでインフレが起きる。なんかインフレとデフレが混ざつたようなことが起きると言っていた。三度の食事を一度にすればいいんだよ。それは魂がはつきりする。

現実^{げんじつ}にいかにも主体的^{してい}に対^{たい}するかと。経済^{けいぎ}的な計算^{けいさん}ではない。そういう自由^{じゆう}は本当^{ほんとう}の法則^{はうそく}に従^{したが}うんです。人間の法則^{はうそく}ではないよ。だから、どんなことが起きても、この御霊^{おんたま}に在^あるときには、逆に御霊^{おんたま}の力が働^{はたら}きたもう。絶対^{ぜったい}に行^いき詰^ぢまらない。復活^{ふくたつ}せるキリストは昇天^{しやうてん}して天界^{てんがい}にいらつしやるが、

「あなたと一緒に私も、死んでも死なない生命^{せいめい}をいただいて進^{すす}んで行^いきます」

と。こういうわけです、この復活^{ふくたつ}節^{せつ}は。

本当^{ほんとう}は、「リバイバル」ではないんだ。

「新生^{しんせい}」

と言^いつた方がいくらいです。新たに生きる新生^{しんせい}だ。この新^{あら}は古^{ふる}びない新^{あら}たです。「カイノス」という新^{あら}た。古^{ふる}びないところの新^{あら}しいのがこのキリストの復活^{ふくたつ}の生命^{せいめい}です。そういう烈々^{れつれつ}たる現実^{げんじつ}を生^いきていきます。……

おわかります。

